

チリ・パタゴニア1968-69 —ある学生探検の記録

第14回

海の放浪民「アラカルーフ」(カワシュカル)

安成哲三 やすなり てつぞう

名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学, 地球環境学)



イラスト=安成 晶

この連載は、現在の私ではなく、35年前に学生だった私の書いた記録である。当時、京都大学探検部に所属する学生であった私は、仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち、そして2年近くを費やして1968年によく実現した。帰国後、私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた。内容は、探検の思い立ちから帰国まで、私たちは何をやり、何を聞きし、そして何を考えたかを、あくまで私自身を通して記したものであるが、いくつかの不運が重なり、結局、そのまま35年間、眠り続けることになってしまった。今回、1960年代末の学生による「探検」の記録として、ほとんどそのまま『科学』に、十数回に分割して掲載していたことになる。

氷河地域での調査の後、ウェリントン島の基地プエルト・エデンから大型モーターボートの「サンハビエル号」で、人跡未踏の複雑な諸島部の水道を通り抜けて太平洋岸までの数日の小航海を行い、エデンに戻った。第12回、13回は、その航海の記録を報告した。今回は、プエルト・エデンを中心に、この諸島部の海を小さなカヌーで巡りながら生きている先住民アラカルーフ族との交流と「調査」について報告する。ただ、今回の報告部分の原稿を読んだ友人の文化人類学者から、特に先住民に対する私の(当時の)見方と文化人類学に対する「偏見」について、かなり強い批判の声を聞いた。本号には、これに関連したやや長めの「あとがき」を文末につけた。

ふたりのミス・アラカルーフ

3月1日、井上治郎(あだ名「ジロー」)とふたりで、エデン湖の南の尾根に調査に出発する。尾根の奥にあるすり鉢状の湖が目的地だ。尾根に取りつくには、ポストのすぐ北を流れる、アラカルーフエ川を渡らねばならない。いつものように河口に出て、対岸のヴァルデラおじさんの家にコールをかける。が、今日はなかなか出てこない。ふと見ると、すぐ近くの岸辺でふたりの女の子がボートに乗って、なにやら草つきをしている。ぼくたちが対岸へ渡ろうとしているのに気がつくと、「ちょっと待って」といってボートを漕ぎよせて

くる。アラカルーフ^{*1}の女の子、アンナとフリアナだ。ふたりともぼくたちから買ったナイロンの赤布をヘアーバンドにして、きりりとしめている。運動会か労働争議の時の赤ハチ巻を思いうかべて、吹きだしそうになったが、かの女らにとっては、得意満面のおしゃれなのだ。笑ってはなるまい。

ぼくたちがボートに乗ると、ふたりで調子を合わせて漕いでくれる。フリアナのスカートはうす汚れてよれよれだが、その下からチラッと白い下

^{*1} アラカルーフ: チリ・パタゴニア諸島部を中心に居住している先住の少数民族。現在はこの呼称は使われず、彼らの自称である“Kawesqar”(カワシュカル)という呼び方に戻っている。しかし、本文では、当時の原稿のまま、「アラカルーフ」の呼称を用いた。





図1——海を放浪している時のアラカルーフの小屋がけ。チョルガなどを採りつつ移動していく。

着がはみ出して見える。それに気がついたのか、あわてて恥ずかしそうにスカートを伸ばし、足をそろえる。そして、ふたりしてコロコロと笑い合う。女の子である。

アンナとフリアナはともに15歳。大の仲良しである。器量もアラカルーフの女の子の中では1,2を争っており、ぼくたちはミス・アラカルーフと評していた。アンナはとくにおしゃれで、いつも洗たくのいきとどいたものを着ている。かの女はまた、人一倍恥ずかしがりやで、年末に、アラカルーフのこたばをテープに録音した時、フリアナがしゃべるのを遠くで見ているだけであった。

フリアナは、ぼくたちの良きガイドとして働いてくれたホセ・トンコの長女である。プックリとほっぺたはふくれ、からだも上衣のボタンが今にもちぎれんばかりに大きい。始終放浪の旅(図1)に出かけて居ない父と、プンタ・アレナスに結核で入院している母の留守をまもって、5人の弟や妹たちの面倒をみているしっかりものである。

ふたりは、校長先生夫人のベルタおばさんのお気に入りである。ベルタおばさんに言わせると、アラカルーフの子供たちで一番いい子だという。校長先生一家がポストにいた頃は毎日やってきて、皿洗いを手伝ったり、いっしょに食事をさせてもらっていた。ベルタおばさんの娘マリソルとも仲の良い友だちで、一家が休暇で帰る時は、船上で3人抱き合って、泣きながら別れを惜しんでいた。

一家が去ってからは、ふたりはピタッとポストに來なくなってしまった。そして2月に入ってふたたび夫妻がもどってくると、足しげくポストにやってきだした。



図2——プエルト・エデンにいるアラカルーフの女性と子供達。

チリ政府は、アラカルーフ族に対し、たんに物資を援助するという保護政策をとっている。そのためか、アラカルーフのおとなたち、とくに年よりの中には、卑屈で気力もなく、ただポストにも乞いに來るものがある。だが、アンナとフリアナに代表される子供たちには、そういった暗さがまったく見られない。両親のかわりになって幼い弟や妹たちをみるフリアナには、たくましささえ感じられる。もちろんふたりはまだ少女だ。時々ベルタおばさんに「もう下着がなくなっちゃったの。おばさん、どうしましょう」とおねだりに來る。しかし、その態度に卑屈さはなく、むしろ母に甘えているという感じだ。かの女らは、保護政策にたよっている1世代古い親たちを通りこして、直接チリ人の先生を実質的な相談相手とするようになっている(図2)。

前世紀末から失敗に失敗を重ねた、白人の一方的な同化政策のため、チリ領パタゴニアの3部族(ヤーガン、オーナ、アラカルーフ)は絶滅寸前に追いやられ、チリ政府はそのため、保護政策に切りかえた。この政策も、少数で残ったものをますます無気力化するものでしかなかったが、やっと今になって、自分から、異質文化を取りこんでいこうという姿勢が、アラカルーフの子供たちから出はじめている。アンナとフリアナはその意味で、新しい世代の代表である。

ここで、チリ・パタゴニアの原住民の同化政策の失敗の歴史をみてみよう。

ドーソン島伝道館の失敗

かつて、フェゴ島からチリ領パタゴニアの諸島



部にかけては、チリ・パタゴニアの原住民のヤーガン、オーナ、アラカルーフの3つの狩猟採集民族が多く分布していた。その数は、航海者たちの記録によって大きく違うが、19世紀はじめには、どの民族も少なくとも千の単位はいたようである。しかし、19世紀後半に入ってから始まった、白人の開拓事業の進行とともにいずれも激減し、現在は、ヤーガン、オーナ族は、混血したものを除けば、もうほとんどいないといっている。アラカルーフ族は、このプエルト・エデンの空軍ポストの前に小屋をたてて住んでいる8家族約50人が残存するほぼすべてである。

どうしてこんなことになったのか。

ヤーガン族に関しては、有名なブリジェス夫妻の宣教、同化事業の力で、次第に狩猟採集民から牧場の労働者となっていき、白人との混血が増え、その結果、純粋のヤーガン族は減っていった。未開民族の、いわゆる文明化という意味においては、もっともうまくいった例のひとつであろう。ブリジェス夫妻の苦労した話は、津田正夫氏の『火の国・パタゴニア』(中公新書)にくわしい。

いちばん悲惨な状態で絶滅寸前へと追いやられたのは、オーナ族である。かれらは、ヤーガンやアラカルーフのように、カヌーで海を放浪する民族ではなく、フェゴ島に、陸上の狩猟採集民として適応していたためだった。悲劇の中心となったのはドーソン島の伝道館であった。

1880年頃、チリ領マジェラン州の経済開発が始まると、原住民の問題がおこってきた。ヤーガン族は、不毛の諸島部に住んでいたため、アラカルーフ族と同様に開発には問題ではなかった。が、オーナ族は、牧羊業に最適のフェゴ島に、ひろく散って住んでいた。その数は、陸の放浪民族であるため定かではなく、あるものによれば4000人、少なく見つかるもので数百人前後、とまちまちであるが、さいはての地に住む3民族の中ではもっとも多く、もっともはっきりと社会構造がととのっていた。フェゴ島開発をはじめた白人たちは、かれらをあたかも害になる獣のように追い散らした。ある場合には、開発会社の命令によって、かれらの一部は虐殺された。牧畜業の開発は、他のすべての考慮に優先しており、オーナ族

の運命は、冒険的企業家たちの意のままにあった。オーナ族の多くは黙って白人の暴虐に耐えていた。しかし、一部のものは、白人の入植地に攻撃をかけて抵抗した。とくに、まだ開拓が緒についたばかりの地域で多かった。そこで、オーナ族を文明化するとともに、羊たちもかれらからまもる効果的な方法が導入された。フェゴ島に付属した小さな島にオーナ族を集め、そこで宣教師の指導のもとに、政府や牧場の助けを借りて生活手段を見つけさせ、少しずつ同化しようというものであった。

1887年、サレジア教団がプンタ・アレナスにやってきた。チリ政府は教団に、フェゴ島に隣接した小島ドーソン島のすべてを、20年間自由に使用させる許可を与えた。ドーソン島には、13万haの森、2万5000haの牧場、500頭の牛、7000頭の羊からなる農場があり、さらに、オーナ族を収容する1軒の館、学校、礼拝堂、製材所、工作場が宣教師たちによって建てられた。

最初の5年間は、アラカルーフだけが伝道館の訪問者だった。海の放浪民であるかれらは、いくらかの食糧の援助を受けたり、たまに子供たちを、カヌーで旅に出るあいだあずける程度だった。オーナ族は、あらゆる強制収容、すなわち逮捕の手から逃げまわって抵抗した。それでも、1895年には、65人のアラカルーフと、111人のオーナが収容されていた。やがて、飢えと例にない寒さに収容されるものは次第に増加した。子供たちには初歩的な読み書きが教えられ、年上のものは作業場へ運ばれた。しかし、自分たちの土地を離れ、うまく適応していた人たちとのすべての関係がばらばらにされてなされたドーソン島への定住の試みは、みじめな結果となっていった。

オーナたちは、伝道館というひとつの会社の工場労働者として雇われているようなものだった。そして、より勤勉なチリ国家の一員とするため、新しくやってきたイタリア人宣教師たちの指導にわたされた。かれらはオーナ族のことばも話さず、学校の教科書も、無思慮に、チリの1年生用のものを手渡すだけであった。

島での生産物は、オーナ族の存続と文明化に使われるということになっており、オーナたちは、ひとりあたり1ポンドが手渡され続けたが、経



済的方法による同化の結果も大したものではなかった。たしかに、かれらの必要最低限のものは満たしてくれ、ある程度豊かでさえあったが、伝道館が建てられてから9年後、最低限の知識でもって文明生活に入れる条件にいたものは、ひとりもいなかった。また、かれらの社会の激しい変化は、とくに子供たちの健康を害し、月に4~5人の子供たちが死んでいったという。診療所とは名ばかりで何の医療処置もとれず、プンタ・アレナスから海軍の船が定期的に診療に来て補った。

死亡者は年々増え、生き残りは伝道館をとび出し、オーナ族の文明化の問題は、環境激変による死亡と四散という悲しいかたちで解決された。

1911年9月、一時期は500人以上も収容していたというドーソン島の伝道館は閉鎖された。伝道館のまわりには、いく度となく掘げられ、最終的には800もの棺が眠ることになった墓地が、さびしく残された。

アラカルーフのことば

3月4日。寺本巖氏とホセ・トンコの家に、ぼくたちの使いふるした長ぐつと少々のお菓子を持って、別れのあいさつがてら訪問する。かれはぼくたちの水先案内として、よくやってくれた。

家といっても、木の板を張りあわせた粗末な小屋である。犬が寄ってくる。アラカルーフたちはかならず犬を飼っている。エスキモー(イヌイット)のように犬ぞりに使うといった定まった目的もなく、なんとなく飼っている。カヌーを漕ぎ出しての猟にも連れていき、夜は抱いて寝るという。

中から出てきたのはフリアナだった。ホセは猟に出ていていない。どこまで行ったのか、いつ帰ってくるのか、知るよしもない。母も結核でプンタ・アレナスに入院させられている。入口に立つフリアナのうしろから、小さな兄弟たちがこわごわ顔をのぞかせる。

「じゃ、お父さんが帰ったらよろしくね」と言ってものをわたし、記念撮影を済ましてかえる。

実は、ぼくたちはテープレコーダーを一緒に持ってきていた。ホセの家に入って、どんなふうに生活をしているかを見、ホセや子供たちと話した

がら、アラカルーフたちの生活や心情を記録しておきたかったのだ。しかし、よそさまの家に、両親のいない時に入りこむなどということはやりにくく、残念ながらやめることにした。

ところが、ポストに帰るとすぐ、フリアナが小さな弟のアルベルトと妹のヴェロニカを連れてやってきた。ぼくたちからお菓子などをもらったことをさっそくベルタおばさんに報告に来たようだ。

そこで、アラカルーフのことばをテープに収録することにする。すでに1度、年末にやはりフリアナにしゃべってもらい、収録はしていたが、さらに多くの語彙を吹きこんでおきたかった。

アラカルーフたちは、自分たち以外のものと話す時はスペイン語を使うが、自分たちの間で話す時は、今でもかれらのことばを使うことが多い。

自然に関することば、人間の体の各部の名称、生活に関した道具類の名称、あいさつのことば、この付近の地名、数等々。校長先生夫妻は、そばで一坐懸命、スペイン語-アラカルーフ語の対訳にして記述してくれる。ただ記述に困り、しかもさかんに出てくる発音がひとつあった。のどの奥で空気をはき出しながら、空気との摩擦で音を出す、モンゴル語に見られるKHの発音とほぼ同じものである。たとえば、モンゴルの王成吉思汗は、チンギス・カンでもチンギス・ハンでもなく、のどの奥でカとハの中間の発音をするのが正しい。

数を1から順番に聞いていくと、3以上はすべて khéstal としか言わず、別に「たくさん」は、ときくとやはり khéstal. アラカルーフ語には数は2までしかない。

未知の言語を学ぶ時に、人類学者や言語学者がよく用いる方法に、「これは何?」ということばを引き出して、逆にそのことばを使って次々といろんな物の名前を収録していくやり方がある。ぼくも試みにやってみた。

「^{ケ・エス・エス・ト}これは何ですか、というのは?」

「え、どれ?」

つぎに、マジックを持たせて、文字や絵をかいもらった。校長先生の教育のおかげで、フリアナは自分の名前はちゃんとかける。絵は、日本の幼稚園児のかく絵の感じだ。ただ、アルベルトに、エデンに時々やってくる「ナバリノ」号をかい



もらったら、驚くほど細かいところまで描写している。かじやスクリューの形、ブリッジまでちゃんとかいている。プエルト・エデンの人たちにとって、定期船「ナバリノ」号は、生活の中でいかに大きな位置をしめているかを感じさせる。

アラカルーフを「調査する」ということ

ところで、ぼくははじめ、できるだけアラカルーフ族の調査もやってみようと思っていた。少なくとも1週間はかれらの小屋で生活を共にしてみたいなどともくろんでいた。が、結局できず仕舞に終わった。しなかった理由としては、この遠征隊の主目的ではなかったため、資料調べや調査方法についての準備が足りなかったこと、現地では大いに計画が狂って時間が足りなかったことなどがあげられるが、なにかもっと根本的な理由があるように感じていた。しかし、エデンにいる時は、その理由がわからなかった。

帰国後、一緒にエデンにいた友だちと話している時、ハタと気がついた。

ぼくたちはいかなるかたちで、プエルト・エデンの社会に入りこんできたのか。

軍艦に、将校と共にサロンで食事をする待遇で乗り込み、エデンに降りると水兵たちに荷を担いでもらい、ぼくたちはただ横で監視しているだけ。空軍のポストではお客として扱われる。いっぽうアラカルーフたちは、ポストに多くの食糧を頼り、やってくる船に集まっては細々と物を売って生活している。

これでは、いくらかれらと寝食を共にしようが、ぼくに対し、心を開いてくれるはずがないではないか。ポストのすぐ近くにアラカルーフの小屋がならんでいるにもかかわらず、3カ月の滞在期間中、ほとんどそこに足を踏み入れなかった心の奥には、かれらの社会へのたんなる侵入者になるのではという不安がつきまとっていた。ホセ・トンコの家に入れなかったのもそのためである。

人類学者が、調査した民族や人間に、調査後どれほどの心のこりがあるかで、その人類学者の仕事のでき、ふできがわかるという。また、人類学の調査者は被調査者でもあることに耐えねばなら

ぬともいう。確かにその通りかもしれない。しかし、こんな例はどうだろう。

ぼくたちがプエルト・エデンに着いてしばらくしたある日、ゲレロ氏から、アラカルーフ族に關した立派な、唯一とも言える報告書を見せてもらった。フランスのヨゼフ・エンペレールという人類学者が1946～58年の間に、3回にわたり調査した結果をまとめたもので、『海の放浪民』という題になっている。報告は精緻を極め、チリ・パタゴニアの博物誌や航海史の資料にもなる。先に紹介した航海者たちの遭難、ドーソン島の話などもすべて、この本に紹介されているものである。

たまたま付近の猟師の子供たちがポストにやってくるので、ぼくはパラパラとその本をめくって、中の写真を見せていた。今いる空軍のポストやエデン付近の風景が載っており、かれらも「あ、この建物だ」などと言い合って楽しく見ていた。調子にのってめくっていくのを、

「おい安成、もうやめとけよ」

と横から中島暢太郎隊長が言う。何のことかわからない。が、隊長に指摘されて気がついた。本のうしろの方に、アラカルーフの裸の写真があるのだ。もし子供たちがその写真を見たら、かれらはアラカルーフをあざ笑い、ばかにするだろう。フリアナやアンナは学校で他の子供たちからかわれるかもしれない。そんなことより、フリアナやアンナ自身がこの写真を見たらなんと思うだろうか。ちょっと下着がはみ出しただけで恥ずかしがるのに、本の持ち主のゲレロ氏も、この写真には頭にきたらしく、写真の下に、「とても古い写真、今はそうじゃない!」と書きこんであった。

調査された民族に見せにくい報告書とは、いったいどういうことなのか。

日本で、一時期、外国の教科書の日本紹介が時代錯誤もはなはだしい、いまだにチョンマゲや人力車の絵を載せている、と騒がれたことがあった。その後、日本のアピールが功を奏してか、最近はかなり改まっているという。

ところが、アラカルーフ族の場合、その比ではない。かれらが裸ないしは裸同然でいたのは、空軍のポストがまだない頃、1940年以前のことである。『海の放浪民』は1963年の出版である。



むろん、著者に悪意があったとは思われない。むしろ、アラカルーフ族に深い愛着を抱きつつ、人類学的情熱を傾けて書いたということを、本の全体から感じさせる。だが、文化というより文明の程度の高いものが、文明程度の低いものを調査するということには、調査するものの個人的な愛情や好意だけでは片づかぬ問題があるのではないか。

外国の教科書がまちがっていても、日本人はそれを指摘し、逆に外国に正しい認識をアピールすることができる。また、例えば、ルース・ベネディクトの『菊と刀』*2のように、日本人自身が被調査者になっている報告書があれば、ぼくたち日本人は、それを翻訳し、読み、逆に『菊と刀』批判を外国に伝えることができる。

文明人の人類学者は、未開民族の報告を、あらゆる手段、本、新聞、ラジオ、テレビ等を通じて世界に伝えることができる。ところが、未開民族は、たとえ人類学者を逆に観察し調査しても、かれに対する批判や評価を世界に訴えるすべを持た

ない。人類学者の、自分たちに関する報告書を見ることもできず、たとえ見たとしても、ほとんどの場合、わからない状態にある。

こういった、置かれた立場の明らかな格差を無視して、いくら調査者は被調査者でもあるとか、かれら(調査される民族)とは友だちであるとか言っても、欺瞞にしかすぎぬのではないか。

日本で、南米南端に行くというと、「あの辺には、まだ素っぱだかのままカヌーを漕いどる原始的な民族がおるそうやな」という人がいた。実は、ぼく自身もまだそうであることをひそかに期待していた。今から考えればまったく恥ずかしいかぎりであるが。

ところが、人類学者の中にも、できるだけ未開で原始的な民族がいることを望む気持が大なり小なりあるという。未開民族の持つ問題をいかにすべきかということよりも、いかに人が目をつけていない民族を材料に立派な報告書を書くかという論理が先行しているわけである。

人類学者は、本来、未開民族の正しき認識者であり、よき伴侶であると思っていたが、「未開民族を調査したら、かれらと友だちになれへん」と奇妙なことを言って人類学志望を断念したぼくの友だちのことがわかるような気がしてきた。

*2 『菊と刀』: 米国の文化人類学者ルース・ベネディクトが書いた日本人、日本文化論。第2次大戦後の日本統治を行っていた米軍部からの依頼による調査にもとづいている。日本文化について、「恥の文化」などの概念を提出し、大変話題になった。長谷川松治訳、現代教養文庫、社会思想社(1967)。

この回に関するやや長いあとがき

この号の最後の部分で、「人類学」に対するやや批判めいたことを、当時の私は書いている。友人の文化人類学者からは、この見方はおかしい、人類学者は、対象となる現地の人たちと友好な関係があつてこそ、いい研究ができるしそれが基本であるという抗議された。その通りであると今の私は思っている。ここで書かれた問題は、今思い出してみると、大きく2つに分けられると感じている。ひとつは、628ページにも書いてあるように、私たちは、チリの政府や海軍に協力を受けつつ、まさに大名行列のように、現地に入ってきた立場であった。私たち自身、現地の先住民族であるアラカルーフの人たちに対して、すでにまともな「人類学調査」を行える立場ではなく、彼らにとっても、親しく対等に付き合える存在ではとてもなかったはずである。当時の私は、このことを「人類学調査」そのものに敷衍して

しまい、本文のような記述になった。もうひとつは、帰国直後、私たちが直面し、また積極的に関わった、大学での全共闘運動の影響も強い。この運動では、既存の学問批判が強くなされ、私たちの探検部も、自主的に活動を停止し、「探検とは何か」の議論を続けた。この中では、探検する者と探検される者の関係を見直すという議論も、毎日、毎晩のように行われた。この原稿は、そのような中で書かれたものであり、当然、そのときの雰囲気にも強く影響されている。探検部OBの本多勝一氏(当時朝日新聞記者)が、『探検される側の論理』という本を書かれたのも、この頃である。この問題は、しかし、人類学のみならず、科学全般の持つ問題として現在にも引き続いており、例えば地球環境問題における「南北問題」も、同じ性質を持っている。探検され、調査され、研究される立場の人たちにとっての科学とは何か。私たち研究者にとって、すぐれて現代的な大きな課題でもある。

